



スフォルツェスコ城古代美術館 彫刻の行程

第八展示室 板張の間 レオナルドの装飾

1466年にガレアツォ・マリアがフランチェスコ・スフォルツァの後継者としてミラノ公国の領主となった。ドゥオモ寺院の脇の集会所用宮殿に住まいを選んだ父親と異なり、ガレアツォ・マリアは現在のスフォルツェスコ城の前身であるボルタ・ジョビア城に住居を構えた。1468年の夏に祝われることになっていたサボイア家のボーナとの結婚を前にビスコンティ家時代の城塞を公爵の官邸にしようと、一連の工事を開始した。

その工事は城の拡張と数多くの空間の装飾はもとより多岐に渡るもので、特に公爵の私邸のための空間にはルネッサンス時代の委託者の慣習通り、ガレアツォ・マリア自身が装飾絵画の題材はもとより人物の仕草から造形やポーズにいたるまで命じて作らせた。

装飾計画は、公爵邸の一階の接見及び謁見そして会議用の公務用として定められた「緑の間」(サラ・ベルデ)と「小鳩の間」(サラ・デッレ・コロンビーネ)と「スカルリオーニの間」(サラ・デッリ・スカルリオーニ)と「公爵の家紋の小室群」(サレッタ・デイ・ドゥカーリ)、「公爵の礼拝堂」(カッペラ・ドゥカーレ)はもとより、今日「象の回廊」

(ポルティコ・デッレレファンテ)と呼ばれる開かれた間と、別名「塔の間」(サラ・デッラ・トッレ)とも呼ばれる赤地の壁と天井ポールのトにスフォルツァ家の象徴的図案が浮き立つ「板張の間」(サラ・デッレ・アッセ)である。

そしてコルテ・ドゥカーレの二階にある各間の壁や天井ポールのトも、大広間の壁に

は狩りの場面が描かれ、公爵と邸内の人物が壁の中を駆け巡り、シカやダイノや様々な動物の住む森が一面に描かれ、隣り合った小鳩の間の上にあたる空間には『沢山の鳥の大画』を、公爵の間の上には天井に『大きなライオンの象徴的図案まで全て金色で描かれ』、そして最後にスカルリオーニの間の上には実物大の公爵とその家族が要人や家来や召し使いらと共に描かれるという、膨大な絵画装飾がなされることになっていた。

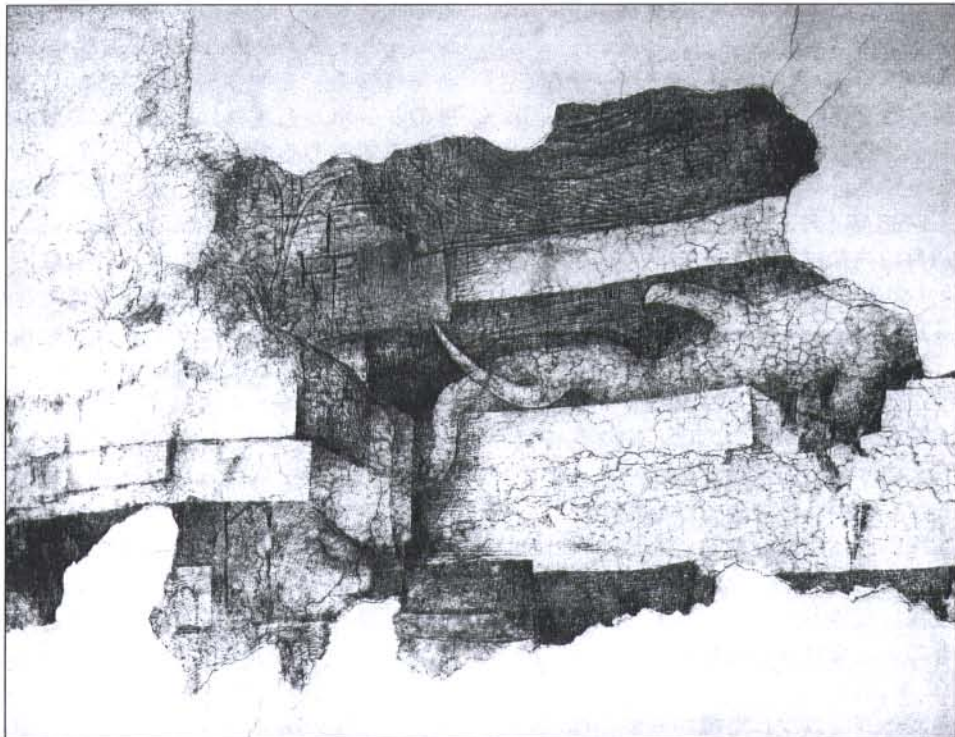
1800年代末期に城の修復作業を任された建築家ルカ・ベルトラミが残した公爵の私邸の装飾に関する記録によると、彼がスフォルツァ家に関する資料をひもといてみると、その資料で部屋の内部に木の要素がある事に触れていることから、それは正に板張りでなければならないと解釈してしまった。

そして、その言葉はいまでも使われているように、もはや永遠のものとして、板張りの間の名前の由縁となった。

この展示室の絵画装飾はガレアツォ・マリアではなく、ルドビコ・イル・モロが依頼したもので、その宮廷には多くの画家や建築家や詩人などが呼ばれ、中でも一番

有名なのがレオナルド・ダ・ビンチである。イタリア・ルネッサンスにおける天才芸術家が、元来の板張りの壁と天井ポールのトの装飾を行なったのである。

室内の天井の植物が絡む装飾は、1893～1894年の1800年代末にようやく発見されたもので、部屋の一方の壁全体を白く塗り込めていた厚い漆



レオナルド・ダ・ビンチ作、「板張の間」の壁の単色装飾の部分 (1498年頃)。



喰をはがしたときに、思いがけず元来の装飾を発見した。

これは、修復のために出費したピエトロ・ヴォルピ弁護士夫妻と修復家ルスカのおかげで、彼らの名は展示室の天井に記述され永遠に残され、板張の間は1902年に一般に公開された。

ルカ・ベルトラミが行なった絵画装飾の回復作業は、本来のレオナルドの立案の解

釈の仕方と、修復家による過度の絵画補充などから、大方、公平な作業であったと言えよう。

つまり、部屋の一方の壁に認められた装飾を単色の木の上張りして隠し、無視してしまったからである。今日ではそれは旧来の装飾だったことが分かっているが、当時ベルトラミはレオナルドの作品よりも古いものであると信じていたのである。

同時に、16世紀の祝賀の碑文も、短いフランス占領時代に消し去られ、その代わりに既に述べた記念の碑文で埋め合わされた。

1954年に新たな修復作業に着手され、ベルトラミの板張りの木の板が取り外され、部屋の壁に長く伸びた苛まれた最初の単色を取り戻された。一方天井装飾は、1900年代の画家が付け加えたものをとりのけた。

こうした作業のおかげで、レオナルド・ダ・ビンチがこの部屋に自筆で装飾したとされていたものと符合する岩や根や幹の造形と植物が絡む、もはや消耗した天井ポールの装飾が日の目を見た。

資料をたどると、1498年4月、巨匠は板張りの間の装飾を手がけていたが、9月以内には終了することを約束している。長い年月、レオナルドはサンタ・マリア・デル・グラツィエ教会の食堂の『最後の晩餐』の製作に携わり、完成を待っていた。

しかし、そのミラノの有名な作品とは異なり、板張りの間の装飾がさほど人気を博さなかったのは、総体的に装飾の発見が新しいうえに、題材の解釈も確かに難しいことから、知名度に貢献しなかったのかもしれない。

板張りの間の装飾に思いきって取り組むために、レオナルドは正確な図象計画を基礎に置かねばならなかった。おそらく、作品を依頼したルドビコ・イル・モロの助言か、あるいは又、その人となりから自然に着想を得たのであろう。

重なる岩の中に生えたゴツゴツした根が植物の構成の始まりで、首尾一貫して土から生え、力を内蔵しつつ、天



レオナルド・ダ・ビンチ作、「板張りの間」の天井装飾（1498年頃）。

井にからまる枝を支える長い木の幹を揺り動かすという「雄大な自然の詩」の表現である。

もしも、ルドビコ・イル・モロの政治的大志と教養、そして、植物の世界に対する注意深い観察者であり、秀でた解釈者である芸術家、レオナルドの個性とを評価したならば、一般的な自然賛歌として板張りの間を解釈したただ

けでは満足できかねる。

故に、人によってはレオナルドの装飾は、「本当は古典文学に出て来るギリシャのテンペー溪谷のシンボル化であり、自然の恵と野性とのコントラストが和らぐ、心地よい場所を表現したものである」とし、また他の者は、昔の建築家ピトゥルービウスの作品を基本にしたシンボリック表現であると言う。

どちらも底無しの根をもつ巨大な幹、そしてハート型の葉と赤紫の実をつけた桑の木の表現に関する証明は、レオナルドの全てのフレスコ画に見えるものとして納得できる。その葉がカイコの食用となる桑の木は、ラテン語で「モルス」と言い、作品の依頼人ルドビコつまりモロを暗示させる。植物の外観の特徴のうえに、またこのシンボルとミラノ公爵との関係を深める余地がありそうだ。と言うのも、モロつまり桑の木は、古来から賢さと慎重さのシンボルとされ、ルドビコの政治をほのめかしているようでもあるからだ。

楽しく絡まる植物は、太い堂々たる柱のような木の幹で支えられている。これは正確には、スフォルツァ領を支える柱となるミラノ公爵への賛歌である。今だに天井ポールの目立つ銘や紋の中央に配されたものと金の輪郭の中の公爵の紋章はルドビコ・イル・モロの偉大さをほのめかしているようだ。

銘は全政権時代を通じて公爵が皇帝派であったことを意味する。マクシミリアン皇帝とシャルル8世とは、ルドビコは皇帝に肩を入れており、姪と皇帝との結婚、そして、ルドビコは爵位を授かるなど公爵が切望するであろう事柄で最大限に盛り上げている。

しかし皇帝の承認は、フランス軍が到来した後まで公爵領をルドビコが保有できる保障とはならなかった。フランス王ルイ12世は、ミラノを屈服させ、ルドビコ・イル・モロをミラノから追放した。それは1499年のことで、丁度、板張りの間でそれを祝ったことが記述にあるが、それは後に加えられたものであることは明白である。